学びや タイムスリップ

⑮ 子どもを描いた絵画 （明治時代～）

その時代の世相を反映

教室、講堂、廊下―。学校ではさまざまな場所によく絵画が飾られていますが、じっくりご覧になったことはあるでしょうか。京都の学校ではこうした「学校美術品」が実に2千点以上も所蔵されています。

その中でも目に付くのは、子どもの姿を描いた絵画です。明治時代になって学校が作られ、近代教育の考え方の中で子どもに目が向けられるようになると、多くの画家が子どもを主題に制作を行いました。そうした作品の多くが学校に寄贈されたのです。

明治の画家、久保田米僊が描いた「園児遊戯図」（写真1）には、オルガンの曲にあわせて輪になって踊る園児たちが描かれています。

この作品が伝わったのは下京区の尚徳中（元尚徳小）であることから、尚徳校の敷地内に開園した尚徳幼稚園（のち楊梅幼稚園）での唱歌遊戯を写生したとも考えられています。和装と洋装の児童が一緒になり外国由来の唱歌遊戯を楽しむ姿は文明開化期の子どもの姿をよく伝えます。

写真2は、京都に生まれ菊池契月に師事した画家、堀井香坡が描いた「少女」という作品です。小学生くらいの女の子が籐の椅子の上に足を抱えて座る、非常にかわいらしい姿で表現されています。髪形が特徴的で、後ろ髪を短く切りそろえたモダンなショートカットは昭和初期の雰囲気をよく伝えています。

その他に、日本画家の秋野不矩が自身の子をモデルにしたと言われる戦後の作品「青年」（中京区の元日彰小蔵）では衣服などが描かれず、青年期特有の身体が表現されるなど、時代によっても実にさまざまな子どもの姿を学校美術品に見ることができるのです。

学校で何げなく飾られている絵画は普段あまり注目されることがありません。しかし、長い歴史の中で集められたこれらの作品群をじっくり鑑賞してみると、画家が子どもに向けたたくさんの視線を見て取ることができるのです。

（京都市学校歴史博物館 学芸員 森光彦）

◇

今回紹介した「園児遊戯図」は学校歴史博物館（下京区）で4月2日から21日まで展示します。

写真1、久保田米僊「園児遊戯図」（1887年頃、元尚徳中蔵）

写真2、堀井香坡「少女」（昭和初期、嵯峨小蔵）